新生児訪問で実施されている産後の家族計画支援の実状と課題

神﨑江利子 *,1)、黒野智子 1)、村松美恵 1)、室加千佳 1)
1)聖隷クリストファー大学、

Ⅰ　緒言

本研究の目的は、開業助産師と勤務助産師が捉える産後の家族計画支援の現状と課題を明らかにすることである。今回は新生児訪問で実施されている産後の家族計画支援の実状と課題について述べる。なお、ここでいう家族計画支援とは、それぞれの家族の事情に合わせて子どもをつくり、子ども虐待に繋がる望まない妊娠を防ぐような支援をいう。

Ⅱ　方法

1)研究対象：A 市助産師会に所属し、実際に 1 年以上産後の家族計画支援を行っている助産師。データ収集期間は 2011 年 12 月から現在に至る。**2)データ収集方法と分析方法：**新生児訪問で実施している産後の母親への家族計画支援について、指導内容と方法、助産師の思いや考え、施設と地域との連携等について半構成的面接を行い、承諾を得て録音して逐語録を作成した。データは共同研究者複数が読み込み、産後の家族計画支援の実状と助産師の認識に関して類似した内容に分類した。**3)倫理的配慮：**研究対象者には口頭および文書で研究の趣旨と方法等を説明し承諾を得た。また、本研究は聖隷クリストファー大学倫理審査委員会の承認(承認番号 11021) を得て実施した。

Ⅲ　結果・考察

本研究は、調査期間を延長してデータ収集・分析を行っている。今回は 4 事例の分析結果を報告する。

1) 対象の属性：助産師 4 名、新生児訪問経験年数は平均 10.25 年(SD±7.4)であった。

2) 産後の家族計画支援の実状：家族計画支援の内容や指導に費やす時間は、子どもの数や母親の希望、その場の雰囲気等により調整されるが、A 市が作成したパンフレットを基に、全例に産後の身体の仕組みや産後に活用できる避妊方法について情報提供していた。育児に追われ自分の身体がおろそかになっている母親に“産後の健康を守る”ことを目標として、子宮がん検診を勧めたり、訪問で夫の様子をみながら、産後に起こる妻の心身の変化を夫に理解させ、家族計画への協力を依頼していた。また、“上手くいかない夫婦関係が虐待につながる”と捉え、今回の妊娠をきっかけに家族になろうとしている夫婦が、妊娠･出産を受け止め､｢夫婦でいること､家族になることがきちんと捉えられる｣ように“家族としてのありかたを伝える”努力もしていた。助産師は 望まない妊娠を避ける為に「家族計画支援は大切なこと」と捉え､育児相談が主となる 新生児訪問の限られた時間の中で、「 母乳をあげている間は妊娠しないと思っていた」母親や「夫婦生活に関心がもてない」母親の 状態に合わせ、ポイントを絞った産後の家族計画支援を行っていた。

3) 施設・地域との連携： 助産師が新生児訪問を行う対象は様々な施設で出産している。訪問時、母親のニーズに沿った 具体的な家族計画支援ができるよう、各施設の産褥入院中や 1 か月健診で行われている支援内容について情報収集を行っていくことが必要である。また、家族計画支援はプライバシーに関わるデリケートな支援であることから、初対面の助産師には相談しにくいことや、顔見知りの助産師に訪問に来てもらうと母親の安心につながるため、施設・地域の垣根を超えて、地域の助産師が施設内に入り込んで連携していけるような一歩踏み込んだケアを考えることが必要であると考える。

今後の展望：現在、A 市内の総合病院で行われている家族計画支援については調査中である。今後は助産師の関わりの少ない診療所での家族計画支援について調査を行っていく。今回の研究結果は第 27 回日本助産学会で発表予定である。